
NORMALIZE

hayate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NORMALIZE

【Nコード】

N5615Z

【作者名】

hayate

【あらすじ】

入学および在学条件——『天才』であること。このたった一つのルールを掲げる天樹学園。日本の未来を背負っているとも言われるこの学園に、一人の少年がスカウトされた。名を、高瀬一夜。彼は、何一つ才能のない人間だった——

プロローグ（前書き）

どうもこんにちわ、h a y a t eと申します。

天才と凡才、そんなテーマのお話です。ただし、ガチで頭がいいとかわるいとか、音楽ができるとか絵が上手いとか、そういうのとはちょっと違います。あくまでアクションなのです。

一人でも読んでくれる人がいるような、そんな作品にしたいです。

プロローグ

天才。

凡才。

言葉にすれば、この程度。

だがそこには確かに、厳然たる差があつて、それは誰もが心の奥底ではわかつていること。

才能の有無、それだけの違い。

しかしその『それだけ』が、時に大きな差異を生み出す。

あるいは、時代さえ変えてしまうほどに。

——ならば。

もし、仮に。

その因子たる天才を集めることができたとしたら、何が起こる？

誰にもわからない。

わかるわけがない。

だけど。

世界を変えてきたのは、いつだって天才だ。

だったら、天才が一点に集結すれば。

そこにはきつと。

——何かが起こる。

『彼』がそう考えたのが、今から五十年前の話。

* * *

高瀬^{たかせいちや}一夜は逃げていた。

それもおそらくは、この短くは無い十五年の人生で一番の必死さで。

「はっ、はっ、はっ……ッ！」

緊張からバタバタとやたらうるさくなる足音を自覚しながら、ひたすら走る。

まだ五月になったばかりだというのに、その額からは玉の汗が見て取れ、適度に切りそろえられた黒髪も皮膚に張り付いている。

今朝、採寸以来初めて袖を通したブレザーの制服も、今は発汗を促進する効果しかない。

「はっ、はっ、はっ……ッ！」

そこは、とある学校の廊下だった。

ただし、一般的なそれとは、大分異なる。趣自体はそれほど変哲というわけではない。ただ、こういった事情からか、やたらと破損箇所が多かった。

見えるだけでも、床（リノリウムだろうか？）に空いた直径十センチほどの穴、中ほどが斜めに切られて面積が半分になった窓ガラス、天井には焦げ痕まであった。

おかしい、どういうことだ、と一夜の胸中で疑念が渦巻く。

さつきまでいた西棟はこんなものでは確かになかった。開校から三十年が経っているとは思えないほど綺麗な造りをしていた。

だというのに、なんだこの有様は。いくら別棟とはいえ、なぜこれほどの違いがあるのか。

流れる景色のなかにこれらの惨状を確認して、一夜は思う。

（くそっ！　こんなところ来るんじゃないかった！）

微妙に涙目になりながらも、廊下の端まで走りきり、即座に体の方向を変える。

案の定そこには一階から二階に上がるための階段があり、一夜は一も二もなく、その最初の段に足をかける。
その時だった。

「待てコラあ！ 吹き飛ばすわよ覗き野郎！」

突如、不当な呼び名と不穏な命令が耳朵を叩き、少年は慌てて振り返る。

マズイ。この声は確か、そう。一ノ瀬初花いちのせはつかとかいう女の声だ。
確か、八雲やくもから聞いた話では、こいつの『才能』は――

「――っと、そんなこと考えてる場合じゃない！ とにかく逃げないと」

回想を途中で打ち切り、逃走を再開するために体の向きを戻す。
と同時に、一息を吐いた。

焦りはいまだ消えていなかったが、それでも今の声で少々余裕が持てた。おおよその予測ではあるが、音量からしてまだ自分とはもうすこし距離があるはずだ。追いかけてくるコースが自分のそれをなぞっている以上、そうそう簡単に追いつかれることはないだろう――

という一夜の『甘い』考えは、
まったくの予想外、もしくはある意味予想通りに、
簡単に打ち破られる。

「吹き飛ばッ！」

先ほどの台詞の後半と同意義の怒号、しかし明らかに違いがあっ

た。

吹き飛ばすわよ、と、吹き飛ば。

その差異に込められた意味をわずかに思考した瞬間、

ドンツツツ！ と、一夜の背後で爆発が起こった。

「な、あ——ッ！？」

のみならず、当然のようにそれに追隨する形で、とんでもない爆音が鼓膜を、衝撃が肢体を襲う。駆け上がるうと足に力を込めていたことも手伝って、一夜は一気に階段を上りきった。

が、勢い余って踊り場にたどり着いたと同時に、思いっきり足がもつれ、勢いそのままに壁に激突した。

……それも、頭から。

「~~~~~~~~ッ！？」

声にならない叫びを上げながら、一夜はごろごろと床の上を転がりながら悶える。

はたから見たら相当に間抜けな行為に間違いないが、幸か不幸か踊り場にも二階に至る階段にも誰もいなかった。

十数秒たって、ようやく痛みが薄らぎ、

「ああもう！ なんだったんだよ畜生！」

がばつ、と床に両手をついて上半身を起こし、一夜は叫びを上げる。

上げてから、何が起きたのかを考える。

とはいっても、既におおかたの見当はついていた。ただし、非常に認めたくない答えだったが。

状況が、解答を如実に表している。

辺りに立ち込める黒煙。

鼻につく火薬の臭い。

そして、一階廊下の端の床、つまり先ほどまで自分がいた場所のすぐ後ろ、そこにはつきりと残った焦げ痕。

ここから導き出せる解答は――

それを心中で呟くよりも早く、

彼女が姿を現す。

「――つたく。ずいぶんとまあ逃げたじゃない、変態覗き野郎。アタシから逃げられると本気で思ったわけ？」

なんのためらいもなく、彼女は上履きで焦げ痕の上に立つ。

煙る視界の中で、破壊の爪痕をステージにして、

彼女が立っている。

傲然と。

自然に。

まるでこれこそが自分の舞台だと言わんばかりに、彼女は屹立していた。

一夜が、呟く。

「一ノ瀬、初花……」

その言葉が、聞こえていたのかいなかったのか。

判然とはしなかったが、しかし彼女は答えた。

「あんたがどのクラスだろうと、どうだっていいわ。だけど、後悔しなさい。この一ノ瀬初花に――バミング・ビューティー『爆撃の姫』にケンカを売ったことをね」

——この学園に数多存在する、『^{ジーニアス}天才児』の一人として。

第一話 始まりを告げる男（前書き）

どうも、読んでいる方がいらっしやったら、こんにちわh a y a t
eです。

この第一話は、ある意味まだプロローグのようなものです。派手さ
もまったくありません。本格的な始動は次からです。

そんなこんなで、今回もよろしく願います。

第一話 始まりを告げる男

これも運命だと思えば少しは楽になるだろうか、と少年は考えた。
あるいは、夢でもいい。

とういうより、夢であってくれ。

そんな現実逃避の願望を胸に、左手で自分の頬をつまみ引っ張ってみる。

痛い。

そして、それだけ。

「……だよな」

諦めたように呟く少年の耳には、現在進行形で歓声が聞こえている。むしろ、歓声しか聞こえてこない、と言うべきか。

その事実思い至り、少年は周囲を見渡す。

とある公立高校の校門をくぐってすぐに設置された、やたらに数字の羅列が書き連ねられた立て板。そしてその前にわらわらと集まる自分も含めた集団。

彼らは種々様々な、という前置きはつくものの、皆一様に制服を着込んでいた。詰襟、セーラー、ブレザー……無論自分も、三年間通い通した中学校の詰襟を着込んでいる。

そして、もう一つ。

目に入る全員が、まるで少年に見せ付けるように（被害妄想だという自覚はある）、笑い、あるいは泣き、しかし心から幸せそうに大騒ぎしていた。

なんのことはない、実に典型的な合格発表の模様だった。
ただし。

「はは……俺以外、全員受かってやんの」

もはや乾いた笑いしか出ない。

自分だけがあの輪に入っていけない。なぜなら、自分は不合格だったから。

受験番号なら、十回は確認した。それだけでは飽き足らず、一から順番に見ていき、何かの手違いで自分の番号が紛れ込んでないかも探した。ドッキリではないかと、プラカードを持ったスタッフがいないかも探した。

結果わかったのは、どういう冗談か、自分以外の学生が一人残らず合格していたという、ふざけるなと叫びたくなるような現実だけだった。

「……………」

もう一度、頬をつねってみる。

痛い。

やはり、それだけ。

「はあ」

そもそもなぜ自分は落ちたのだろう、と少年は考察してみる。

ボーダーと呼ばれる、目安となる成績くらいは取れていた。過去の合格者たちを見ても、少年の出来ならば通つても不思議はない、どこか順当に行けば通るはずだった。

事実、少年の担任も「これならば問題ないだろう」と太鼓判を押してくれた。その全てを鵜呑みにしたわけではないが、実績のある教師だったこともあって、自分の人生における重要な選択を決定したのだ。

当然のことながら、内申も抜かりない。特別な役職（生徒会関連

など）に就いたり、無遅刻無欠席とまではいかないが、ある程度模範生と呼べるレベルではあった。

やはり、何を振り返っても、落ち度は見当たらない。
でも、落ちた。

それが、それだけが、結果。

何時間この場で考えても、この現実是不変。

「……帰ろ」

首をすくめて、心持ち視線を下げて、少年は踵を返す。

三月の風は、まだ寒い。

防寒着を身につけなかったことを悔やみながら、少年は歩き始める。

そして、その足が校門に差し掛かったところで、一度振り向く。

誰も彼もが幸せそうにしているのを目にして、

「……………」

何も言わずに、少年は——高瀬一夜は家路についた。

——これが、一ヶ月半前の話。

* * *

一夜が公立高校の受験に失敗した日から、すでに二週間の時が過ぎ去っていた。

もちろんその間、何もなかったわけではない。

担任からの慰問ついでに私立紹介を受けて、見当の末にその私立

高校に通うことはすでに決定していた。あっさりと決まったことからもわかるとおり、こちら辺では滑り止め専用とまで言われるほどの学校ではあったが。

そんな事情があるとはいえ、なにはともあれ、ひとまずは高校に進学できることになったわけである。

既に受験失敗という精神的な傷もある程度癒えていたこともあいまって、一夜は心機一転これからの未来に思いを馳せていた。

——そんな折だった。

八雲断が、高瀬家のインターホンを押したのは。
やくもたち

インターホンでの呼び出しに応じたのは、一夜だった。

常ならばそういった雑事は母親である高瀬静たかせしずに任せているのだが、あいにくと今は買い物に出かけていていない。

ついでに言えば父親は工作中、中学生の妹にいたっては春休みを利用して友達と旅行に行っている。

必然的に対応できるのは一夜一人になるわけだ。

「えっと……どうぞ」

「これはどうもご丁寧に。いただきます」

初め、一夜はこの来訪者を家に上げる気はなかった。

しかし、八雲と名乗ったこの男が玄関前で語った内容、そして持参してきた一冊の資料が、一夜に現在の状況を作らせた。
すなわち、八雲を招き入れるという状況を。

「いやーおいしいですねえ。これ、どこかの銘茶だったりします?」

「別に、そんなことはないですけど……」

高瀬家のリビング。

ダイニングテーブルとは別の、足の低いテーブルを挟んだ二脚のソファ。そのうちの一つに、背もたれに寄りかかる、などとはせず、に背筋を伸ばし、八雲は一夜に差し出されたお茶（無論、銘茶でもなんでもない安物）を飲んでいた。

その反対、もう一脚のソファに腰を下ろした一夜は、ぼんやりとそんな八雲を眺めていた。

（この人が、あの『天樹学園』のスカウトマン、か……見えないな）

一見して、スカウトマンというよりはサラリーマンといった方がいいような男だった。

仕事の賜物か、あるいは別の理由からか、くたびれたスーツとよれたネクタイのせいで敏腕という印象はまったく受けない。

ただし、容姿はそれなりのものだった。三十三という年齢（本人が勝手に喋った）よりも大分若く見える顔立ちを、銀縁のシャープな眼鏡が飾っていた。童顔のせいかわ、くせつ毛の黒髪も愛嬌に見える。

もっと服装に気を使えば、案外モデルでもやっていけるんじゃないか？ と一夜は思った。まったくもって一夜には関係ないことだった。

——コトリ、と音がなった。

その音に一夜ははっとなる。少々ぼんやりしすぎていたようだ。

音源は、八雲がテーブルに置いた湯飲みだった。

「さて、と。詳しい話はお母様がお戻りになってから、と思っていたのですが……お戻りになりませんか？」

困ったように軽く髪をかく八雲。

確かにそうだな、と一夜も無言で同意した。

静の帰りが随分と遅い。彼女が買い物に行ったスーパーはここからそう遠くない。常ならば、もっと早く帰ってくるはずだ。

どうせ近所のおばさんにでも会ったのだろう、と一夜は適当に当たりをつけてから、

「あー、もしかしたらまだ結構かかるかもしれません。知り合いに会ってたら話し込んでると思うんで」

「ふむ……。そういうことでしたら、先に一夜君にお話したほうがいいかもしれませんねえ。いつまでもこのままというのも、あなたが気まずいでしょうし。かくいう私も、あんまり初対面の人と二人きり、というのも気まずいですし」

（それはスカウトマンとしてどうなんだ？）

とは思ったが、場を和ませるための冗談かもしれないので黙っておく。

冗談だとしたら欠片も和んでいない、ということも含めて。

八雲はその態度をどう受け取ったのか、一度頷いて、

「そうですねえ……。とりあえずは、先ほどお尋ねしたことを、もう一度訊き直しましょうかねえ。ほら、私ってそういう演出も大事にするタイプですから。核心部分から話し始めるって、かつこいいと思いますか？」

あんたの持論はどうでもいいから早く話せと思いながらも、一夜は「はあ」と曖昧に頷く。

八雲はかすかに笑い、「では失礼して」と前置きしてから、

「——高瀬一夜君。あなた、天樹学園にスカウトされる気はありますか？」

——天樹学園。

初等部から高等部までを一挙に擁する、いわゆるエスカレーター式の学園であり、また広大な敷地や桁違いの設備などでも知られている。

が、それらに反して生徒数は全体で千五百人前後と、かなり少ない。もつとも、当然のことながらそこには『とある理由』が存在しているのだが。

そしてその『とある理由』から、この学園は一つの顔を持っていた。

日本の未来を担う学園、という顔を。

加えて言えば、この顔によって、天樹学園は日本で知らぬ者なき超有名な校として名を轟かしていた。

それも単純な、国民のエリート校に対する羨望としてではない。政府やメディアでさえも、そういつた見方をしている。政治家を志す者たちが、選挙で天樹学園への支援をマニファクチュアの一つとすることは珍しくないし、適当にテレビのチャンネルを回せば、天樹学園に関するニュースが大抵一日に一つはやっている。

では、なぜ天樹学園がこれほど国の注目を集めているのか？

それは謎でもなんでもない、答えは実に単純明快だ。誰かに聞けば、すぐにこう言ってくれるだろう。

曰く。

天樹学園には、

日本の未来を担う学園には、

——『天才』が集っている。

「ようは^{るつぽ}増嶋なんですよ、天才たちの。日本中から天才や神童と呼ばれる少年少女を、我が学園は発掘・育成しているわけでしてねえ。それも、学問、芸術、武術、またはそれらに当てはまらずとも、私たちはとにかく突出した才能をかき集めているんですよ。才能ある若者は、文字通り国の宝、未来ですからねえ。天樹学園があればどこまでも期待を背負っているのも、私が言うのもなんですが、納得できますよ」

あなたは？ という質問の形で、八雲は長口上を終えた。
自分でも芸がないとは思うがまた「はあ」と曖昧に同意して、一夜は考えを巡らせる。

（そんなこと、今更言われるまでもねえ。今の世の中じゃ、天樹学園がどんな学校かなんて、常識レベルで知られてる。もちろん、俺だって。……だから、知りたいのは――）

持参した『一般には出回らない』パンフレットを卓上に広げて、ちらほらと施設説明を始める『天樹学園のスカウトマン』に視線を向けつつ、まだ肝心な部分が聞けていないことに眉をひそめる。

（……こつちから聞いてみるか）

向こうから言い出さないのなら、こちらから促せばいい。
だから一夜は思い切って、『当たり前』の疑問をぶつけた。

「何で俺を？」

「ここら辺の園芸は、私が趣味で担当してましてねえ。初めはただ

の代理だったんですが、思いのほかこれが楽しくて。今ではかなりはまって——ハイ？」

どう考えても個人的な話に移行しつつあった八雲は、突然の質問に首をかしげた。

一夜は、繰り返す。

「『何で、俺を』？」

「……何で、といいましてもねえ。それが私の仕事なものですから」

違う。

そうじゃない。

訊きたいのは、そんなことじゃない。

「あんたが本当に天樹学園のスカウトなら、当然俺のことを調べてるんですよ？ だったら、おかしいことがある」

「と、いいいますと？」

簡単だ、と置いてから、

「『俺には何一つ才能なんてない』。天才ばかりが在籍している学校に、俺なんか誘われるわけがないんだ」

そう。

そこが、一番の疑問点だった。

高瀬一夜は、自他ともに認める凡人である。

八雲が言った『突出した才能』なんて、一つたりとも持っていない。

勉強、スポーツ、美術、音楽、武道。何をしたとしても、人並みのことしかできない。それ以上に、どうやっても届かない。

自分は、天才なんかじゃない。

どこまでも、ただの普通の人間だった。

——だというのに。

よりにもよって、そんな自分にかかった『スカウト』という千載一遇のチャンス。入学〓将来を約束されたとさえ言われる学校からの、それは確かに間違えようのない勧誘だった。

しかし、一夜だって自分のことはよくわかつている。

だからこそ、「はいそうですか」と、このチャンスを気楽に受け入れることはできなかった。

そしてそんな一夜の心情を知ってか知らずか、八雲は指を組みながら、一夜の問いかけに返答し始めた。

「確かに……こういつては失礼なのですが、あなたはどう転んでも天才の類ではありません。凡夫、としか言いようがないわけです」

「……………」

少し、カチンときた。

自覚はあるとはいえ、他人から改めて告げられて、気持ちのいいはずがない。

だから一夜は渋面を作ったのだが、

「——しかし、それでいいのですよ」

「え？」

続く奇妙な逆接に、一夜は思わず目を見開いた。
そして、

八雲断は、

その反応をこそ待っていたかのように、柔和な笑みを作った。

「『それこそが』あなたの才能なのですから」

そつと、一言を付け加えて。

——これが、一ヶ月前の話。

* * *

この約一カ月後。

五月一日に、

——天才と凡才の物語は、幕を開ける。

第一話 始まりを告げる男（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5615z/>

N O R M A L I Z E

2011年12月21日01時49分発行